

綻
び

日芸文芸楊七三

山本
た
ま
子

日曜の昼下がり、池袋駅を出て大きな信号を渡る。私は、背中には重いギターを背負い、右手に平べったいスーツケースのようなエフェクターボードを持って小走りで音楽スタジオへと向かう。膝の裏にコツコツとギターが当たって痛い。大きく息を吸うと頭がすっきりした。冬の冷たい空気は、排気ガス臭い東京でもおいしいと思う。スタジオまでの通り道の公園で、アニメや漫画のコスプレのお祭りをしていた。カラフルで不自然なカツラを被り、布が何枚も折り重なった着物のような衣装に身を包む人、胸とお尻の形がくっきりわかるコスチュームで奇抜な化粧を施した人、異様な光景だった。よくやるよなあ、醜い姿を他人に晒して生きることが一番恥ずかしいことだ。そう思う。

スタジオに着くと、いつものようにロビーでバンドメンバーがタバコを吸って駄弁っている。私はいつも時間ギリギリ、最後に到着する。おはよう、と挨拶を交わす。

「今日、人多かったねー。超たるかったわ」

佐藤がタバコの煙を吐きながらそう言う。

「本当勘弁して欲しいよね」

と、私が答える。

「勘弁してほしいってなんだよ」

多田がスマホをいじりながら、そう言った。

私は何に勘弁して欲しいのか自分でもよくわからなかったけれど、咄嗟にその言葉が出た。

「ユイ、ピアスどうしたの？」

ユイの顔を見て、違和感に気づいた私はそうたずねた。下唇の右端に光るシルバーのピアスが彼女のトレードマークだった。彼女の青みがかかったピンク色の唇と、白い肌によく映えて、可愛らしかった。

「あー、飽きたから外した」

素っ気ない返答だった。

「そっか」

ピアスについて話す気がないのだと思った。だから私も敢えて素っ気ない感じで答えた。

スタッフに案内されて、いつも通り私たちは小さな小部屋のスタジオに入った。突然消えたピアス。妙に冷たいユイの態度。空気が重い感じがする。多田と佐藤もこの空気を感じとっている。いつもならくだらない冗談を言い合っているのに、黙々と準備をしている。ライブを一週間後に控えているからだろうか。いや、今日何かおかしい。ユイは指板に視線を落として、黙々とベースを弾いている。小柄な身体に大きなベースを背負って、器用に指を動かしている。ユイに何か声をかけたいのに、何も出てこなかった。まるで他人みたいで、

心が浮くような感じがした。ギターのエフェクターも調子が悪い。酷いハウリングの音で、耳がキンとする。一つ気がかりなことがあると全て上手くいかなくなる。

「そろそろ始めよう」

多田が場を任切つて皆揃つての練習が始まる。一瞬ユイと鏡越しに目が合った。ユイが何を考えているのか、わからない。カン、カン、カン、カン、と佐藤がドラムスティックを十字に叩き合わせて四つカウントをとる。下腹に響くドラムのバスの音、耳の奥をさらりと撫でる歪んだギターの音、旋律を支える低いのベース音、私の歌がスタジオに響く。私たちが、必ずスタジオ練習の最初に演奏する曲がはじまる。多田は佐藤の方を向いてアイコンタクトを取り、ユイは私の右隣で小さく跳ねるようにリズムを刻む。大丈夫、いつも通り。余計なことを考えずに、とにかく歌って、ギターを弾いた。

三時間たつぷりと練習し終わると、喉にチクリと痛みがあった。無理に声を出し過ぎた。帰りに蜂蜜の飴を買おうと思った。片付けをして、お会計を済ませる。ひと段落して、私たちは、ロビーの丸いテーブルを囲んで一服する。私は、相変わらずユイの機嫌を伺っていた。ユイの吐き出す煙から、過熱式タバコ特有の甘い水蒸気の香りがする。

「次のライブで解散しよう」

ユイは、なんでもない顔でそう言った。

「は？」

佐藤が、プツと煙を吐き出す。私は、なんとなく今日、ユイがこのようなことを言い出すのではないか、そんな予感がしていた。冷静にその言葉を受け取った。

「なんで？」

私がつねると、

「中途半端だから」

また素っ気ない返答だった。

「いや、答えになつてねえから」

多田は怒っていた。

「中途半端でしよう？」

ユイはそう言った。今日、会ったばかりの時よりも明るい表情。でも、相変わらず他人のような感じがした。

「なんだよ中途半端って、意味わかんねえよ」

多田はユイを責めるようにそう言い、頭を抱える。

「うちのバンドは、しおりが核なんだよ。それが揺らいだらお終いなんだよ」
ちゅうとはんば、口の中で何度も呟いた。私は中途半端だ、自覚があった。

「ねえ、だってしおり、このままでいいの？」

「よくない……かな」

「ね？だから、次のライブで最後にしよう」

喉に熱いしこりのようなものを、感じる。涙が出そうだった。どうしようもなく自分が、不申斐ない。

「よくわかんねえけどさ。しおりがダメなら、ダメなんじゃね？」

と佐藤はわざとヘラヘラ笑って、多田の肩を叩いた。多田は、眉をひそめて黙っている。ユイは、いつも言葉足らずだ。もつと、ちゃんとダメな理由を話さないといけない。私の口から、話そうにも涙をこらえるのに必死で言葉が詰まった。

「てか、俺、もうすぐバイトだから、行くわ」

佐藤はまだ長いタバコを灰皿に押し付けて火を消す。俺も、と多田は、佐藤のあとを追うように立ち上がる。

私とユイは、ただ机の中心にある灰皿を見つめて黙っていた。お疲れ、と一言声を掛けて、佐藤と多田はロビーを後にした。

男女の楽しそうな話し声と、聴いたことがない海外のバンドの激しい音楽が、私の空虚な頭の中に流れ込んでくる。私とユイはしばらく黙って座っていた。こういう時、タバコを吸っていれば手持ち無沙汰にならなくて済むのに、そう思った。

「お腹空いてない？」

突拍子も無い質問。ユイは相変わらず、あっけらかんとした態度でそう言った。

「ちよつとだけ」

「じゃあ、なんか食べへに行こうよ」

「うん」

気まずい雰囲気は少し、ほぐれたような感じがした。私たちは、スタジオを後にして、街に出た。新しい空気がパーツと広がる。喉の熱いしこりが消えていく。

「柳家、行こうか」

ユイが言った。

「いいね」

私たちは、人混みを掻き分けるようにして歩いた。はぐれるよ、とユイは私の手を握る。

「子供じゃないんだよ」

「しおりがフラフラ歩いてるのが悪い」

ユイは意地悪く笑う。私はしっかりと歩いていても、フラフラして見えるらしい。しっとりとした冷たい手に引かれて、行き慣れた小さな居酒屋に入った。私たちは、かさばる楽器を店員に預かってもらい、角の席に案内された。適当に注文して、私たちは夕方から酒を飲んだ。随分、気分が良くなった。

「ねえ、どうして解散しようなんて言ったの？」

「しおりのことが好きだから」

ユイは簡単に好きという言葉を口にする。照れくさい気持ちになる。

「答えになってないんだけど？」

笑いながら言った。酒のせいで頭がぼんやりとしてくる。

「しおりの作る曲が、ダメになったからだよ」

突如頭を殴られるような感覚に襲われた。大きな嘘がバレたときのような感じ。何も言えなかった。

ユイは淡々と、

「この前、就活やばいって言ってたじゃん」

と言って、ストローで梅酒のソーダ割りを吸う。

「うん」

「やめちやいなよ」

「親が許してくれないよ」

「バンドはもうどうでもいいの？」

ユイの質問にうまく答えられずに

「どうでもよくないよ。でも、もうできないかな」

ユイの顔を見れなかった。大学三年生になってから、親から就職について、口うるさく言われるようになって。だから、しぶしぶ始めた。自己分析、適職、インターンシップ、エントリーシート、説明会、何もわからなかった。インターネットで調べても興味が湧かず、ただ漠然とこなしているだけで、身にならない。ただただ苦痛で、働きたい企業や、やりたい仕事の一つも見つからなかった。そもそも、この先長く働くことになるかもしれない会社を、こんな短期間で決められない。同年代の人たちは周りから遅れをとるまい、と勢力的に活動している。内定を掴み取るんだ、そういう強い気持ちを持ってない自分は、競争に参加することすらできない。参加したくもなかった。不安が毎日募っていく。そんな中、私は曲が作れなくなっていた。歌詞が書けな

い、ギターを持つ気力がない。大学を卒業してからのことを考えると、どんどん無気力になっていく。今まで自分が作ってきた曲もなんだか、くだらないものに聴こえるようになった。大好きだったアーティストの音楽も、興味が薄れていった。それでも、長い間共にやってきたバンドに迷惑は、掛けられない。無理やり駄作を持つていった。多田と佐藤は何も言わず楽しそうに、それを演奏していた。大丈夫、いつも通り。そう思っていたけれど、ユイだけは気づいていたのだ。私が、もうダメになってしまったこと。薬を使って無理やり眠る日々。薬がないと、激しい動悸がして眠れなくなった。やめられない過度な飲酒、手に付かない授業の課題。少しずつ全てのことが上手いかなくなっていく。もう大学を卒業したら、死んでしまおうか。こんなことで潰れてしまう私は、どんなに素晴らしい会社に入れたとしても、上手くやっていけるわけがない。社会人になっても、細々とバンドを続けていくなんで甘い考えだった。私は、いつバンドを辞めようか、そう考えるようになっていた。

「お待たせしました」

店員がテーブルに料理を運んでくる。ユイは二杯目の酒に手をつける。色白の顔を紅潮させて色っばい、と思った。

「私がしおりを養ってあげられたらな」

ユイは、真面目な顔でそう言う。

「ダメだよ、そんなの」

「だって、しおり才能あるのにもったいないじゃん」

「才能ないから売れてないんだよ」

「たった四年しかやってないのに、諦めが早いよ」

「もう四年もやってるのになって感じじゃん？ 私より若くて才能あるひとはテレビにも出てるし、千人近く呼んでライブもやってるんだからさ」

「大衆にうけることだけが、大切なんじゃないか？」

ユイはふざけて、私の口元にマイクを向けるように拳を差し出して、そう言った。

「大衆にうけなきや、バンドで食べていけませんよ？」

私は、ユイの拳のマイクを持って答えた。

「どうして本当に良いものって見つけて貰えないんだろうね？」

ユイはふざけるのをやめて、そう聞いた。

「結局、流行りの音楽になるしかないんだよ」

「じゃあ流行りの音楽になるにはどうしたらいいの？」

「流行りの音楽としてメディアに取り上げてもらう」

「それだけ？」

「そうです。こだわりも、面白味も、個性も、何もいりません」

言っていて、虚しくなった。

「じゃあ一生流行らなくていいからさ、一生バンドやってたいよ」

「私もだよ」

咄嗟にその言葉が出た。しばらく二人とも黙り込んでいた。店内に流れる、若手の歌手の歌が大きく聴こえる。流行りの曲だった。

「ねえ、多田と佐藤にちゃんと話そうね」

ユイはぼつりと、そう言った。

「うん、あまりにも言葉足らずだったもんね。納得してくれるかな？」

「皆すつとしおりについてきてたんだから、大丈夫だよ」

「そうだといいなあ」

ユイ、私フラフラしてるのかな？ そう聞きたかったけれど、やめた。グラスに残る氷で薄まった酒を飲み干して、私たちは店を出た。すっかり暗くなった空。昏間よりもずっと冷たい風が吹く。相変わらずの人混みもなか、私たちはまた手を繋いで駅までの道をいく。

「ユイ、ピアスまたしてよ。似合ってたじゃん」

「やだよー」

ユイは、意地悪く笑ってそう言った。

「なんでよ」

「ねえ、何かを始めるときとか、やめるときにさ、中々踏ん切りがつかないときってあるでしょ？ そういう時に、目に見える変化が欲しくなるんだ」

ユイは真つ直ぐ前を向いて、そう言った。ユイの大きな瞳は、街灯りを丸ごと吸い込んだみたいに輝いていた。

「それ、すごいわかるかも」

ユイは嬉しそうに笑った。

「私なんか特にさ、高校卒業してからずっとフラフラしてるから、そういうケジメみたいなのがないと、やっ

ていけないんだ」

ふと、ユイの穴だらけの耳を見た。彼女のケジメの数だけ、この穴があるのだろうか。私が、もっとしっかりしていればよかった。また涙が出そうになった。ユイは、フラフラしてなんかない。バンドが解散したら、ユイはどうするの？この質問をしようかしないか、考えているうちに駅に着いてしまった。

「じゃあ、また次のスタジオでね」

ユイが、握っていた手を離して、そう言った。急に冷たい空気に触れて、いやにひんやりとした。

「うん、またね」

ユイは、明るかった。いつものユイだった。嬉しかった。

日曜の昼下がり、新宿駅を出てすぐ、喫煙所でバンドメンバーと会流した。

「本当に今日で終わるんだね」

多田がそう言った。肩まで伸びる襟足を少し切っているのに気がついた。

「全然大実感ねえよな」

佐藤は相変わらずの調子でそう言った。リハーサルの時間が迫る。四人で固まってライブハウスまで歩いた。

「ユイ、昨日眠れた？」

「あんまり寝れなかったよ、緊張しちゃって」

「ねえ、ユイ、お願いがあるんだけどさ」

「何？」

「ピアスあけてほしいの」

「え、就活大丈夫なの？」

「うん、ピアスの穴はあっても平気だから」

「そっか。いいよ、あけてあげる」

私は、今朝薬局で買ったピアッサーをユイに手渡した。ライブハウスに着くと、適当にスタッフに挨拶して楽屋に通してもらう。鏡と机と椅子がずらりと並ぶ白い部屋。既にリハーサルを終えた他の出演バンドの人たちが駄弁っていた。

「いくよ、しおり」

着いて早々、私たちはピアッシングをはじめた。

「うん、お願い」

ユイは、慎重に私の右耳にピアッサーの針を当てて場所を定める。ガシャリ、と大きな音がした。びっくりした。

「綺麗にあいたよ」

ユイは鏡越しに、私にそう言った。満足気な顔をしていた。耳たぶが、じん、と熱くて重い。ユイの口元にあってはいたピアスと同じ、シルバーのピアスが私の真つ赤な耳たぶに刺さっている。これは、私のケジメだった。

「ねえ、ユイはバンド解散したらどうするの？」

私はそうたずねた。

「さあ、どうするんだろう。私もどっか就職しようかな？」

「一緒に就活する？」

「する」

目を合わせて、笑い合った。騒々しい楽屋で、私たちの笑い声は甲高く、目立った。

「バンド解散したら、私、死んじゃうかも」

ユイは、私の耳元でそう言った。低くて落ち着いた声だった。冗談を言っているのだと思った。でも、ユイは真剣な顔をしていた。

「ねえ、今日が終わっても、また会えるよね？」

不安になってそう聞いた。ユイは下瞼にぶくりと涙袋をつくって、意地悪く笑い、何も答えなかった。佐藤と多田が、喫煙所から帰ってきた。佐藤は、

「うわっ、マジでここでピアスあけたの？ 痛そうー」

と、私の耳を見て言った。

「超よくない？ しおりピアス似合うよね」

ユイは楽しそうに、そう言った。ちゃんと質問に答えてよ、ユイ。一つ気がかりなことがあると、前に進めない。耳たぶが痛む。どうしよう。

「もうリハ回ってくるよ、そろそろ準備していこう」

多田の声でハッとすする。今日は、とにかくしっかりやろう。人生最後のライブかもしれない。お疲れ様です、と前のバンドに挨拶をして、入れ替わり立ち替わりで、ステージに立つ。照明のライトが当たって熱い、眩しい。いつも通り、ギターのセッティングをした。適当にコードを抑える。六本の弦を丁寧に、撫でるように弾

いた。綺麗な音が鳴った。大丈夫、今日は上手くいく。

「よろしく願います」

マイクを通して、私の声が入った。ほのライブハウスに響き渡る。スタッフが、願います、と返す。ちっとも流行らない私の曲は、このライブが終わったら誰にも聴かれることはない。私たちがバンドをやっていたことも、私が生きていることも、ユイが生きていることも、何も残らない。耳たぶが、かゆかった。爪でピアスの周りをひっかくと、爪の間に血がこびりついた。

「おい、やるぞ」

佐藤が合図を出して、曲が始まる。いつものフォーカウント。木と木がぶつかる暖かい音。私の隣で、ユイが微笑む。バンドで食べていけなくなっちゃって幸せじゃないか。ユイが私の音楽を認めてくれさえすれば、よかつたじゃないか。私は、私の生活のためにユイを殺してしまふ。なんて恐ろしい人間なんだろう。どんなに美しい歌詞を歌っても、すべて嘘だ。言葉が詰まった。喉に熱いしこりがあった。歌えなかった。演奏が止まる。多田と佐藤が驚いた顔をしている。

「すみません、もう一度願います」

耳から、一滴血が垂れた。白いスニーカーが汚れた。佐藤がもう一度、カウントをとってやり直す。お願い、

ユイ、死んだりなんかしないでよ。私、どんなことがあっても、無理にでも、音楽を続けていくから。ちゃんとできるまで、待っていてよ。いつか私がユイの手を引いて歩くよ。大きく息を吸って歌った。伸びのある歌声、気持ちよかった。ユイは、いつでも私の歌を、愛してしてくれた。多田も佐藤も、私の音楽についてきてくれた。大丈夫、それだけで意味があるよ。大学を卒業するとき、最後の暖かい砦を壊す時、私はしっかりと生きていられるだろうか。私は私の役割を、失わずにいられるだろうか。糸屑みたいになった自分を、なんとかして繋ぎ止めようとするのだろうか。或いは途切れたまま私は、私を失うのだろうか。それでもきつと生きていたいと思う。誰かの愛を頼りに生きていけると思う。生きていようと思う。